

---

月 刊

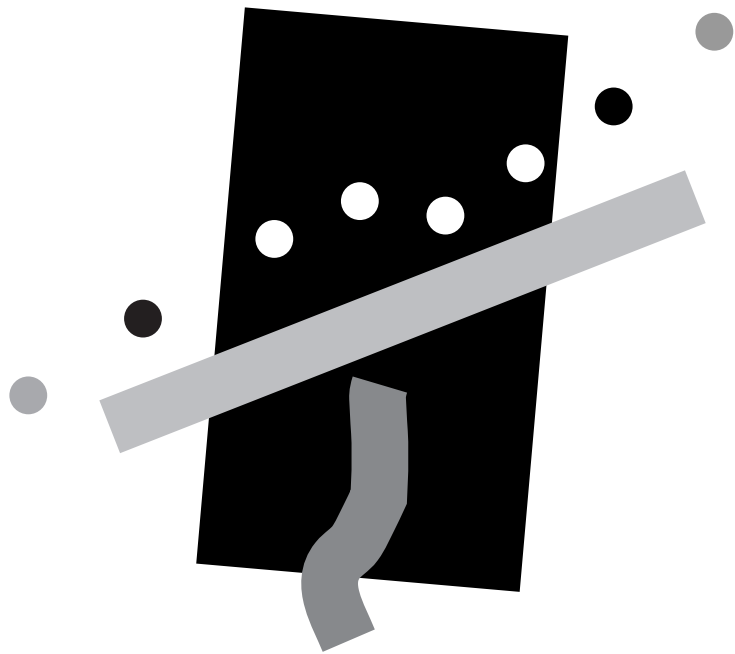
---

# MéLange

---

Vol.146

---



---

2019.09.29

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.145 2019.09.29

「月刊Mélange」編集部

詩・俳句・短歌

晩夏 ……にしもとめぐみ 03  
 自祝（詩）／異次元の歌（短歌）／秋諸相（俳句） ……野口裕 04  
 ねこ 詠 （日独俳句） ……岩脇リーベル豊美 06  
 アスファルト ……中嶋康雄 07  
 みもだえ ……大橋愛由等 08  
 六月の雨 ……田村周平 10  
 発光樹林帯 ……高木敏克 12  
 峠道で少し広くなった空 ……大西隆志 14  
 旧盆 ……高谷和幸 15

エッセイ

益田っこ通信 32号／33号 ……元正章 09  
 アメリカ南部に暮らして④ ……モス堀淵敬子 11  
 「記憶は最大の武器」（南海日日新聞コラム「つむぎ随筆」より転載） ……大橋愛由等 13

連載

神戸詞あしび 135 「全存在を全肯定する華厳哲学に生きた明恵」 ……大橋愛由等 16

◆挽歌

にしもとめぐみ

夏の終わりに瑠璃苺の青い星の花が咲いた  
 不亡草の美しい花々も  
 朝を生きて  
 夜には閉じてしまう

遠雷が聴こえる  
 儂いとき  
 波間のうたかた 松葉に積もる雪  
 朝の月 空の虹

少女の夢 男のロマン  
 言えなかった「ありがとう」  
 あなたのいた時間  
 微笑み おしゃべり 立像

黎明  
 私は あなたを生きられるだろうか  
 残された私たちにも  
 もう 秋が来る

八月は夢花火  
 愛しいひとたち  
 みんな逝ってしまふ  
 さよなら夏の日

※注 瑠璃苺＝ルリジサ、ハーブ、ポリジの和名  
 不亡草＝ホロビンソウ、松葉ボタン

編集部日より★66／2010年から3年ごとに行われ、今回が4回目となる瀬戸内国際美術祭に今回も参加してきた。朝早くに神戸から高速バスに乗り、高松に到着後、ホテルに荷物をあずけ、さっそく讃岐うどん屋に向かった。香川への旅は同時に「うどん紀行」でもある。三食すべてうどんでもいいと思ってこの地を訪れている。最初に入ったうどん屋は常連さんしか来ないような食堂といった店構えだった。喉が渴いたのでビールを頼もうとしたら置いていないと断られてしまった。うどんしか置かないという姿勢なのである。アルコール類を置かないと客単価は上がらないけどいいのかなとちらりと思う。ハンセン病治療施設がある大島で作品を鑑賞したあと、夕食はふたたびうどん専門店へ。ほぼ毎回通っている店に入る。同行者にとって父祖の地が讃岐なので、いきなりうどんを頼もうと思ったら「ちがう」と言われた。まずアテになるものを食べてほどよく胃袋が慣れてきたあとにうどんを頼めとのこである。関西のうどん屋はいきなり麺類を頼んで食べ終わると店を出るファーストフードの類いなので、席に座っている時間は長くない。ここ讃岐のうどん専門店は、うどんとともにすすず時間が関西と異なり短くない。うどんだけしか売らないうどん屋もあるけれど、うどんを含めたさまざまな地元料理と出会う店もある。二日目は早朝から開けているJR高松駅前のうどん屋へ。ランチ時に行ったので行列ができていた。翌日屋島にあるイサムノグチ庭園美術館と民俗村である「四国村」に行く。その夜は高松市内の「まいまい」という讃岐の郷土料理店に向かった。ここはイサムノグチが常連客として通っていた店だった。老夫婦が二人で切り盛りしている老舗で料理もさることながら女将の語りが魅力的だった。／今月の「Mélange」例会第一部「読書会」の話者は野口裕氏。テーマは〈全句集を読むシリーズ①西東三鬼〉です。（大橋愛由等記）

◆自祝

野口裕

手帳を買った帰り道  
電車の隅に座ると  
車両の外側が見えた

車体は夜の糸を纏い  
風切る音に繭を形作る

私は籠もる 夜の中に  
レールの軋みがかきたてるものを  
知らぬでもないが  
まず明日を待む  
まだ何かをなしたわけでもない

もう何年経ったかを知る砂時計

野口裕

◆異次元の歌（三首）

生コンがこの世のものと思えぬほど右折を他所にゆつくり回る

取り壊す予定の社宅灯がひとつベランダぶらんと梅雨のこいのぼり

投函の音はかすかに響くなり黒く錆び付くぎしぎしのそば

◆秋諸相（五句）

秋暑し紙穴そろえ通らぬ紐

鯖雲の月濃きところトンヤレナ

月さやか迷路の果てに砂場あり

深酒やギロチン卿の笑い皺

秋深し笛吹きケトル長鳴らし

## ◆ねこ詠

岩脇リーベル豊美

放課後は片目潰れた猫とふたり  
Nach der Schule –  
mit einer einäugigen Katze  
zu zweit

ネトウヨに背く猫一日しめやか  
Gen den Internet-Rechten –  
die Katze hatte  
einen stillen Tag

猫眠る午後の宇宙へ電話する  
Die Katze schläft  
am Nachmittag –  
rufe das Weltall an

猫のわたしバス待つ花雨の下  
Ich, eine Katze  
warte auf den Bus  
unter dem Kirschregen

## ◆アスファルト

中嶋康雄

道路の隅っこに背高泡立草がたっている  
背高泡立草が黄色い俳句を詠んでいる  
俳句には死んだ亀が乗っている  
下手な俳句は呪いに親しい  
死んだ亀の目脂が垂れる  
甲羅のひびから空気が漏れる  
アスファルトが真つ黒な顔で笑っている  
運転代行が死んだ亀をさらに轢く  
酔っぱらってしまえば  
明日ももう少しだけましに思えるから  
今は眠れる  
むかし空海に会った  
羽虫だったのでろくな話も聞けなかったし  
羽虫だったので話しかけもできなかったが  
変な人だったことは気に引つかかっている  
老獪な漢字が空中を飛び回っていた

その一つに追いついて交尾した  
そのときの空海の  
いやないやな顔だけが今もうろろしている  
なにが曼荼羅だ  
どぶは昔からあったし今もある  
ずっと羽虫はそこで卵から始めている  
アスファルトの軒が五月蠅いので  
魂だけになってもよく眠れなくなった  
夜コンビニエンスストアにガムを買いに行く  
他の魂も来ていたので  
「最近はどうですか」  
と尋ねてみるが  
所不在な新月がどうか  
アスファルトのひびから生えた犬が枯れたとか  
不景気な話ばかりを聞かされる  
空海の話を始めると  
いやな顔をされて唾を吐かれるのもうしない  
アスファルトの手が伸びてきて  
おまえの首を絞めるのをただ待っている  
背高泡立草が天辺だけ残して枯れている

月が外出したくない日の午後の耳鳴り

(へどこにも行けない階段の愉快) 晩夏の野菜をいれる竹籠に異語だらけの詩片と左派好みの林檎と未生の薔薇とかわたれ時刻の欠伸としみじみとした緑の刺繍に満たされたハンカチーフと今日のあなたの異郷の記憶とを放り込み夏のさんざめく光を怠惰に反射している波の波動を間近に感じながら電気鉄道に乗って西に向かつていたところ連山おろしの美々とした風にあたって吃音になってしまった少年がわたしに語りかけようとしているので「スイタイ」という駅で降りて角つこの国策看板まで歩いたところで少年を振り向こうとしたのだが気づかぬうちに少年はわたしを通り越し「王」という字にみえる雲を指差していて「すべてというならすべて」と消え入るような声で話していたので「やはり捜している人は見つかっていないようだね」と少年に語り返したのだが赤黄青とすべて同時に点滅することで有名な信号機近くに住む哲学者の古家に向かう三叉路で小休止しようと思うのだった。へ祖国に語りかける賢しらな愚者についての譚) いつまでたつても覚えきれないほどの引き出しがある箆筒の中から吽形の狛犬をしゃべらせるのが得意な神父がつまみだしたのは「非」を朝な夕な唱えつくして泣く涙も枯れてポブラになってしまった少女たちの「わたしたちが朝に手向けた花をついばんでいたカラスが無残な越境を覚悟した花言葉」の書き置きでありその花言葉に誘発されて椈の林にさまよい入ったのはいいものの林もさめざめ泣いている姿におののき「ここの心根の表象には恩寵も抒事も邂逅もなにも刻印されていない」と覚知して以来その人は横臥して全存在を六角窓からしか視ようとしなくなつたと聞かされている。

## ◆ 益田つこ通信

はじめ  
元正章

## ▼32号／ほんがほんが しとるが (2019.09)

この夏休暇で帰省の折、書棚で埃に被っていた『民衆の知恵を訪ねて』(宮本常一著、未来社1963)を、車中で読む。自然の原風景に触れることは、同時に民衆の原点とも接することになる。地べたで生き続けている人々から学ぶこと。そこに立脚点を置いたとき、都会生活では薄れ消えてしまった「農村的」という風土と良風な気質が昔も今も変わることなく残っている「田舎まち」のこの益田が、もともと「神戸つこ」の私自身の魂のふるさとに思えるから不思議である。

「幼い日からこうしてきたえられ、与えられた仕事を自分のこととして忠実に守って育っていくものに見る素朴で明るい前向きな力づよさ」「村落共同体は生活を守ることを第一の目的としたもので、生産共同を目的としたものではない」「百姓精神の神髄とは、お先走りでもない、が頑固でもない、いつも自分のいるべき地位を見定めて、人の邪魔をしない」「みな律儀な人ばかり」(同著)。こうした気質は良き面でも今も伝えられていて、「益田は仏さんのような人ばかりですよ」と言えないこともない。でも現実はその半面もあって、そこらの微妙な「間合い」を、「ほんがほんが」(出雲弁 without thinking anythingのらりくらり、ぼつとして)で、やっつけていくのが、周りとの軋轢もなく、長続きすることであろう。「いまのまま、ええんかね」と呟き嘆きつつ、それでも、この街はどこか憎めず、かわいい感じがする。「遍一切処」(一切の場所に遍く有る)。しかし、ここは「理」が一切処に遍在するには程遠い。「ほんがほんが」。

## ▼33号／1キロメートル1分 (2019.10)

「1キロメートル1分」とは、こちらでの車の所用時間を指しています。市街の中心地を除けば、信号はあってもなにも等しく、ブレーキをかけることなく進んでいきます。かくて100キロの距離であれば、100分で到着。教団の一番近い教会にしろ、60キロと離れているのですから、100キロ以内の距離であれば、「ちよつと出かけてくるわ」といった感覚です。もつともその心境に至るまでには、それなりの体験を積まなくてはなりません。中山間部を走っていると、ところどころ集落を目にしますが、ほとんどひと気は感じませんし、道行く人など先ず目にすることはありません。いったい、人はどこにいるのでしょうか。

先般、児童公園の掃除を近所の人たちが早朝集まって1時間ほど行いました。老若男女約50人はいたでしょう。毎朝、公園の草取りを日課としている老人もその中にいました。かつては大いに賑わった商店街もシャッター通りに変じています。本業だけでは生活できず、副業として新聞配達や宅急便の運転手をしながら、生計を立てているのが現実。それでも地域の行事には欠かさず参加し、「結い」の心意気は消えることはありません。日本の地方によく見られる共同体の典型が、この益田にも残っています。このような情に熱い純朴な人達に対して、キリスト教の福音はどこまで届いているのか。どこに共有点を見出せばいいのか。伝える人は、「笛吹けど踊らず」といった次元ではなく、本人自身もつと本質的なところで改心しなければならぬのではないかと思ひ悩む、新米の「益田つこ」です。

(編集部註)この「益田つこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間て発信しているハガキ通信を転載したものです。

## ◆六月の雨

田村周平

デラシネって  
根なし草じゃなくて  
根があっても  
根づく土壤がないことだって  
なんだかせつなくて  
ビールの栓を抜いてみる  
瓶の中では  
白い花の足が  
土を求めて  
水の中をあがいている  
ビールをウイスキーにかえても  
雨は止まない

六月の雨にぬれて  
山はいつせいに緑になっていく  
何一つ歌わないものはないのだ  
草や木も鳥や虫たちさえも  
歌っている  
歩いて山に  
わけいつていく事ができない  
ぼくのために  
せめて木霊になつて  
溶けあつてほしい  
六月の雨の中でぼくは  
はや七月の夢みている

(この作品は2019.09.02「カフェ・エクリ」合評  
会で発表されたものを本誌に転載しています)

夫がアメリカ人ということで、なれそめもよく聞か  
れます。

夫とは1987年に大阪で初めて会いました。

彼は、もともと東京大学農学部畜産獣医外科の留学  
生として日本に来ていましたが、留学期間を終えてア  
メリカに帰る前に大阪にいる友達に会いに来ていまし

## アメリカ南部に暮らして④

モス堀渕敬子

た。

私は当時、「Discover KINKI」という英文情報誌を  
作る会社に勤めていました。大阪市内にある長屋の一  
軒家にカナダ人の女の子と住んでいて、彼は彼女の知  
り合いでした。

彼はいったんアメリカに帰ったのですが、一年後大  
阪で再会し付き合うようになりました。私は日本人男

性には振られつづけて当時すでに30歳を過ぎていまし  
た。弟や妹は私より先に結婚していて、私には最後のチ  
ャンスかもしれないと思っていたし、両親の反対はあ  
りませんでした。

父は昔から、「そろばんと英語はやっておけ」と言っ  
ていました。戦時中、英語は禁止されていたので父は中

国語を習いま  
したが、終戦  
後進駐軍の工  
場で働いてい  
た時、発音が  
悪くて英語が

通じなかった父の苦い経験から生まれた言葉でした。

しかし、私がアメリカ人と結婚することになって、  
「葉が効きすぎた」と言っていました。

彼とは1年ちよつと交際した後日本で婚約し、19  
89年6月にアメリカで結婚しました。

ちなみにそろばんは、中学一年生の時2級を取って  
います。



# ◆ 発光樹林帯

高木敏克

機内アナウンスに起こされた。飛行機はゆっくりと成田空港に近づいてくる。雲海を突き抜けると機体の底を破って発光樹林帯が見えてくる。遠い記憶の底から見えてくる風景ではあるが、深い記憶の中に目覚めてゆくようである。生きてゆくのに邪魔な記憶が寿齢五十年の記憶の森に落ちてゆくのであった。

私を迎えるように広大な樹林帯の闇の中から赤い点が少し揺れながらわずかに近づいてくる。赤いランタンが一人で歩いているようにも見えた。

反対同盟は三里塚に野城を構えて測量技師の侵入を拒むため徹夜で目を凝らしていた。地平線はとっくに消えうせてわれわれ三人は完全な盲目状態で闇に沈んでいた。

発色した赤は隣の村に潜入していた赤いヘルメットだった。白いヘルメットに挨拶を兼ねて連絡業務でやってきたのだ。迎える三人の白いヘルメットは浮き始めていた。

「すごいライトだなあ」と日焼けした学生の赤い顔が笑った。

「赤外線ライトだよ。米軍払い下げを神戸の元町で買って来た」

それが赤いヘルメットだけを発色させたのだ。

「ほんとに赤いんだなあ。その光はとも味方のものとは思えないな」

と彼は頬を赤く輝かせて笑った。

「今日からルポに入ったんで、よろしくお願いします」と白いヘルメットで私は答えた。

「ああ、聞いているよ。それで挨拶にきたんだけど、戸村さんの親戚の家に三人で入ったんだよね。ところで歓迎ぶりはどうなの？」

「大歓迎ですよ。大座敷でスキヤキを馳走になって三枚重ねの敷布団で

寝ました」

「ああ、そうなの。でも、どこの家も風呂の湯を変えないみたいだねえ。茶碗も箸も洗わないし」と赤いヘルメットは笑いながら続けた。

「反対同盟のなかにも空港賛成派が紛れていて敵味方の区別がだんだんと難しくなっている。でも、目を見ると同士であることは感覚で分かる」

同士はふっと不思議な笑い方で連帯していた。

「しかし、反対同盟の中にも権力闘争が始まり疑心暗鬼の闇の時代が来るのだろうか？」

何かを予感するように津本が言った。彼は何かを見たに違いない。

「ここでは闇を隔離する都会の衛生観念とは無縁みたいだな。闇の中に裸電球が浮かび、風呂桶は湯気の下に白濁した汗を溜めている。風呂板の下は闇さ」

田中はいつも話をそらす。彼も何かを見たに違いない。

「どうぞごゆつくり」と初めて泊る農家のおばさんは言った。

「ありがとうございませう」と僕は裸になってからも白い湯から逃げるすべを考えていた。

「湯加減はいかがですか」と外の闇から声がした。

「いえ、熱すぎるので、体を洗ってから入ります」五右衛門風呂には底板が浮いている。洗い場らしきものもない。水道の蛇口はあるので風呂の湯を桶ですくつては水で割る。それを肩に掛けると白い湯は底のない大地の闇に吸い込まれてゆく。フワフワと何万年も堆積した土の闇が宇宙と繋がって、地平遙かに樹林帯を発光させている。

「着陸態勢に入ります。もう一度シートベルトをお確かめください」

飛行機が雲の海を抜けたとたんに床が抜け、発光樹林帯が見え、底板が抜けた五右衛門風呂の中で開いてしまった私の口にも白い湯がはいり、身体はドップリと開いた寿齢五十年の樹林帯の土壌に突っ込んでいった。

大橋 愛由 等

詩人・出版社代表

## つむぎ随筆 21

2019. 6. 20

「まあおれが専業主婦に初めて徳島を訪れた人とともに島を巡る時には、母國集落(徳之島町)と大田布集落(伊仙町)を訪れることにしている。この二つの集落で、藩政期に母國集落(1817年)と大田布集落(1804年)という両村一揆が起こったのは専業主婦の歴史なのである。大田布集落にまつては、演劇と立学によってそのあひょうがミンチユの手で表現されてきた。ひょうは劇作家・伊集田美氏(伊仙町面廻)率いる劇団「熱風座」の舞台として米軍政下に上演され、専業主婦の人たちに歓迎された。佐々木謙一(大田布集落)の歴史は、一揆を通過した専業主婦の歴史に終わらず、武器にして現在にもつなげていくのだ。この詩人は、抑圧された島人の苦難の歴史に対する自分の気持ちが継承されるように願う。

「誰のこぼれ、刻み記憶せよ、わが子よ島の地にいつか君よ、島の血にいつか君よ、たぎり起て、百年の朝に起きてもう、べつと燃せよ！」

強い専業主婦社会において、伝承的事実を含めた記憶の継承こそがミンチユの最大の武器であろう。この詩人は知悉していたのである。

(神戸市)

## 記憶は最大の武器

## ◆峠道で少し広くなった空

大西隆志

ベストの判断とは  
流れた汗で卑屈に  
小枝を左右に振り  
基点となる場所を  
くどくどと確保し  
登りの消耗は空へ  
降りの眺望は抑え  
雑兵がかたわらを  
すり抜ける音への  
静かな幻想を抱え  
際限なく前に進む

自転車の時間帯を  
身体が支える季節  
崩れを感じる者に  
剥き出しの岩肌へ  
しみだす水の子ら  
羊歯のあいだから  
光の粒がこぼれる  
木陰にはいるヒト  
裸にちかい装束に  
ことばにならない  
歌のような旋律だ

一つ目の伝承さえ  
からだの谷間にも  
残ってはいないか  
峠は忘れ去られた  
水の源への鳥瞰よ  
へばったのは誰か  
流れ落ちる個人へ  
旋律にあわせて響  
青空の下にあるか  
交じり合った枝を  
電脳のなかに挿す

## ◆旧盆

高谷和幸

窓ガラスにポツリと飛蝗がくつついたところから波紋が広がっていた。草がまばらになり、灼熱の地面がむき出しになった時空座標を列車は走っているようです。体操服の長頭蝗の子どもたちが軀を密集してうごめいていました。くつついた他者の距離は神経を刺激してぐるぐる回転して、暗い欲望の地中で新しい軀になることを欲求している。ザムザではなく、ケーファーがク・フェールにまるごと違うみんなに変身する。大きな目玉が現れ、精霊を食い尽くした口が黒い血を吐いていた。キチキチ、キチキチ。そのように翅があたる音を昔から聞いていた。そういえば、数日前にあの人たちも送られていったのだろうか。気がつくとも長頭蝗が何匹も窓ガラスにくつついている。「激しい銃撃戦で壁に無数の穴が残っている」それは天地霄壤ほどの違いで背景を入れ替えていった。

(この作品は2019.09.02「カフェ・エクリ」合評会で発表されたものを本誌に転載しています)



